

学術奨励賞を受賞して



伊藤 秀美 理事

愛知県がんセンター研究所 がん情報・対策研究分野

私は、疫学者として研究を進める中で、住民ベースのがん登録に実務ならび研究面から関わってきました。研究面では、このがん登録情報を用いて、がん対策だけでなく医療にも役立つ成果を生み出すことを目標としてきました。全国がん登録協議会(JACR)にその成果を認めていただき、このたび「がん登録資料を活用したがん医療・がん対策の評価に資する記述疫学研究」に対し、名誉ある学術奨励賞を受賞しました。貴重ながん登録情報を日々作り上げている各がん登録室の皆様、JACR関係者はじめ、がん登録関連の研究仲間の皆様へ感謝いたします。また、私のがん登録や記述疫学研究に携わってきたことの一つの証として、本受賞を心からうれしく思います。

いくつかの研究成果の中から、受賞講演でも紹介した研究成果を3つ紹介します。

1) 慢性骨髄性白血病死亡率の経年変化の観察研究
(Chihara D, Ito H, et al. *Oncologist*, 2012; 17:1547-1550)

日米の死亡情報を用いたJoinpoint解析により、イマチニブという分子標的薬の登場が、地域ベースでも、慢性骨髄性白血病の死亡率を減少させたことを観察した研究です。臨床試験だけでなく、地域ベースに収集された死亡情報を用いて、ある新薬の効果を評価したという点でも、重要な研究であったと思います。

2) がん登録資料を用いた高齢者治療の評価(Masaoka H, Ito H, et al. *Cancer Sci.*, 2017; 108: 1673-1680)

21都道府県のがん登録データを用いて、前立腺癌患者の5年相対生存率を算出し、詳細に検討しました。80歳以上の高齢者の限局前立腺癌では、分化度によらず、また治療の有無によらず、相対生存率は100%を超えていて、少なくとも58%は過剰治療であった可能性を示唆する研究となりました。本研究は、高齢者の前立腺癌で早期の場合には経過観察という選択が妥当であるかという臨床医の疑問に答えることができた研究で、最近、泌尿器科学の国際雑誌Journal of UrologyのEditorial Commentに注目すべき研究として取り上げられました(Griebing TL. *J Urol*, 2018;199:1375)。

3) 日米の地域がん登録データを用いた組織型別肺がん罹患の経年変化とたばこ消費量との関連について(Ito H, et al. *Int J Cancer*, 2011; 128, 1918-28)

フィルターのないたばこからフィルター付きへのたばこデザインの変化は、肺がん罹患を減少させたか?という疑問から本研究を実施しました。組織型別に罹患動向を観察し、それぞれのたばこ消費量との関連を評価したところ、フィルターのないたばこ消費量と扁平上皮癌の罹患、フィルター付きたばこ消費量と腺癌罹患とが関連していることが分かりました。フィルター付きたばこは健康に悪影響の少ないたばことして1960年代から売り出された経緯がありますが、たばこデザインの変化は、肺がん全体の罹患の減少にはつながらず、扁平上皮癌に代わり腺癌罹患を増加させたにすぎませんでした。肺がん罹患減少に重要なのはやはり禁煙対策であることが分かりました。本研究のアプローチは、新しいたばこ製品である加熱式たばこや電子たばこと病気との関連の評価にも役立つのではないかと思います。

これらの研究からも分かるように、明確な研究目的があれば、粒度の荒い住民ベースのがん登録情報でも、悉皆性の高さが強みとなり、十分に面白い研究を実施することができます。私は、この点に記述疫学研究の魅力を感じています。受賞の栄誉を胸に、これからは住民ベースのがん登録のみならず院内がん登録やその他の保健医療情報を活用して、社会に貢献できるエビデンス作りに邁進していきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

